Tくんのこと

田中三保子

Tくんは三才の男児である。入園当初から緊張もものおじもせず、にこにこと通ってきた。前年まで兄のお供で、園を見知っていたせいもあったかもしれない。好奇心のかたまりといった表情であちこちを探索して回っていた。まだ新しい環境にも先生にも馴れずに戸惑っている子どもたちが、泣いたり、すねたり、うろうろしていたり、私から離れられなかったりという中にあって、Tは実に生き生きとしてみえた。

〃先生〃にはあまり関心がないらしく、そばに寄ってくることも要求を出してくることもなかった。興味のおもむくままに遊ぶので、時々困ったことをしてくれるのだが、それは私の目の届かないところでのことが多かった。水に特に執着し、いっときは水遊びばかりしていた。水道の栓を一杯に回して勢いよく水を流す。流しの縁からとびはねた水が床に水たまりを作っている。蛇口を上に向けて〃噴水〃を楽しむ。室内で制止されると戸外の水道へ行って同じことを始める。その遊び方のあまりの凄まじさに、子どもたちはびっくりして声もなく遠まきに見ていた。お手洗いの水道で遊んでしまうこともあった。とめられると、ドアのところに行って大きく開きバタンバタンといわせる。水を飲んでいると思えば、流しの前の棚やガラスに水を吹き出して水びたしにする。そういったことを、実に楽しそうににこにこしながらするのだった。

私は、まだ馴じめずにいる子どもたちの世話に追われて、Tには振りまわされてばかりいた。Tが何

かしてからその行為に気づくことになる。どうしても止めたり怒ったりの対応になってしまう。できるだけ怒らないですむようにしたい。そのためにはTの行為が度を過さないうちに把握しなければならないのだが、すぐ視界の外へ出ていってしまうTの姿をとらえ続けるのは実際には大変難しかった。水を使っている時には「このくらいにするとちょうどいいわね」と水流を弱めることを何度となく繰り返し、上手にしている時には誉めるなどもしてみた。誉めると得意そうな顔になる。ある時、外の水道で水をじゃあじゃあ流しているのに気づいた。あわてて近づくと、背中を向けていたはずのTがこちらにちょっととからだを向け水流を弱めながら言った。「このくらいでちょうどいいんだよね」「……」「ぼくいいこでしょ」ほんとね、えらいわと出かかったことばが喉にひっかかってしまった。Tにとって私はまだ信頼に足る人間ではないのだろう。大人の価値観を押しつける人間としてしか映っていないのかもしれない。

一緒に遊ぶ機会を作るようにもしてみた。Tからは寄ってきてくれないので私の方が近づいていくことになる。その時、Tは床に座りこんで絵本を読んでいた。一人でたどたどしく字を追っていることはよくあったが(字はほとんど読める)、私がみんなと絵本を読んでいる時に輪に加わることはなかったので、良い機会だと思った。通りがかりにTのそばに座りこんだ。Tの様子をみながら私は声を出して読んでみた。一ページは読ませてくれた。ほっとして二ページ目へすすむと、Tは絵本を持ったまますっくと立ちあがった。視線は開いたページに落としたままである。私に背を向けると、積木で遊んでいる子どもの向こうに腰を下しそのまま読み続けた。こんなふうにいつもするりと身をかわされてしまう。私のことを意識しているようではあるが、彼の世界の中にはなかなか踏みこませてくれないのである。

ところが、身のまわりの世話をやかれることは少

しも嫌がらない。むしろ喜んでさせてくれる。水遊びでびしょ濡れの衣類を着がえる時には全身で私に寄りかかってくる。ズボンなどはまるで二歳児にはかせているような気がするほどである。そこで、できるだけ世話をやかせてもらうことにした。食事の際には途中から立ってふらふらし始める。そばについていて食べさせると嫌がらずに食べてくれる。歯磨きも水遊びに脱線してしまうので磨いてあげる。いまだに食事と歯磨きの世話までしているのは彼一人である。

子どもたちも馴れてそれなりに遊び始めると、衝突も自然おきてくる。Tもあちこちでトラブルをおこすようになった。通りしなに積木を壊していく。使っているおもちゃを持っていってしまう。おままごとに勝手にはいりこみ我が物顔に遊び出すということもある。多い時には日に何度も「Tくんがー」という訴えを受けるようになった。相手によっては黙っていないからけんかになる。そうなると彼は相手の髪の毛をひっぱった。相手は声もなく涙をぽろぽろこぼして泣いている。止めると「だってー」と泣いて足をバタバタさせた。「もうしないよー」とさけぶので、私が迷った揚句手を離すとまた相手につかみかかることもしばしばだった。「それはいやよ」「〇〇ちゃんがかわいそう」語気を強めて言うと、「せんせいなんかあっちへいけ」「もうきこえないよ」ということばが返ってきたりした。初めの頃は叱られると感じるだけでさーっとどこかに消えてしまったのだから、抗議するようになっただけでも大変な変化である。

お面作りがはやり出したが、Tは知らん顔である。ところが、ある日突然「うさぎのお面作って」と自分から言ったままいなくなってしまった。珍らしいことなので大急ぎで作ってかぶせてあげると、もううさぎになりきっている。ぴょんぴょんはねて犬の子と遊び出す。その日は一日お面をつけたまま過ごした。翌朝、お面をかぶってにこにこして登園

してきた。その次の日も。その日の帰り間際、他の子のぞうのお面をとって泣かしてしまった。Tが帰った後になって、ぞうのお面が欲しかったのではなかったかと気づいた。作っておいたお面を翌朝手渡すと、とても嬉しそうにかぶる。ぞうのお面は何日も続いた。今では、「あのね、ぼくね○○がほしいんだ」と言ってくれる。

二学期も終った。砂場で友だちに泥をかけたり、一緒に遊んでくれないからとけんかをしたり、積木をけっとばして壊したり、そしてまだ〃水遊び〃もするけれども、ごっこ遊びなどでは誰よりもその気になって遊ぶし、けんかで泣いて私の胸に顔をうずめるようにもなってきた。

二学期の最後の一週間、Tは食中毒で休んだ。終業式の日、他の子ども達が帰った後で母親と一緒に来てもらった。誰もいない保育室でTと私と、そして母親は少し離れて、座った。こまに色を塗ってもらう。言われたことに黙って従ってくれる。母親の「小さいときから手のかからない子でした」ということばが、今更のように思い出された。本当にそうなのかもしれない。だけど、どうしてこんな幼い頃から場面によって自分を出し分けることができるのだろうか。〃いい子〃でいることにそんなに神経を使うのはよしましょうよ、いつものあのきらきらした目のTくんになりましょうよ、そんな思いをこめてTに話しかけるが、彼は顔もあげずにただ手を動かしている。何を聞いても「うん」と小さな返事が返ってくるだけで、最後まで嘘のようにおとなしかった。「さようなら」と言うとやっと顔をあげちらっと私を見た。でもそれだけのことで、私の思いは伝わらなかったようであった。母に手をひかれて帰っていくちんまりとした後姿を、私は複雑な気持で見送った。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）